

論説

現代日本語の使役表現 ——「拡大文型」の試み——

前田直子

1 はじめに

動作・作用といった動きの発生を、それを引き起こしたものの立場から表す表現を「使役」という。

- 1) 息子をイギリスへ留学させます。
- 2) 娘にピアノを習わせます。
- 3) しばらくここに車を止めさせてください。

日本語教育において使役表現は、一般的に初級の後半で導入される。それだけこの表現は難易度が高いと認識されているからであるが、それでも初級の文法項目に入れられているということは、日本語の基本的な文法項目（文型）の一つであると考えられているからでもある。

使役表現が持つ難しさとしては、形態的、統語的、意味・機能的な点がしばしば指摘され、考察がなされてきたが、本稿はそうした先行研究とは異なり、使役表現が文中に出現する位置、具体的には、単文に出現するか、複文に出現するか、複文の場合は、従属節（先行節）か主節（後行節）か、前者の場合、どのようなタイプの従属節（先行節）に出現するのか、という点に関して、実証的な調査を行う。それによって、使役表現の新たな特性を探ると共に、日本語教育への応用についても考察を試みる。

(2)

2 使役表現の困難点

使役表現の難しさは、第一に、形態的な点がある。動詞の語幹に「(s) as (er) u」という形態素を付けるという形態変化がまず難しい。第二に、統語的な点があり、動詞の形態変化と共に、動作主の格助詞をニ格（他動詞文および一部の自動詞文）またはヲ格（自動詞文）に変換しなければならない。第三には意味的な問題がある。使役には、強制的な使役と非強制的な使役があり、後者には許容や放任など、動詞のタイプや文脈によって、さまざまな意味が表現されることが、指摘されている。

- 4) 子供に漢字を練習させる。〈強制〉
- 5) 子供に1時間、ゲームをやらせる。〈許容〉
- 6) 子供を自由に遊ばせる。〈放任〉

更には、使役表現とはどのような時に使われるのか、という機能的な問題もある。使役表現は、動作・作用といった動きの発生を、それを引き起こしたものの立場から表すものであるが、同様のことは、使役表現を使わなくても表すことができる。

- 7) a 子供に漢字を練習させた。
b 供に漢字を練習しなさいと言った。
c 供に漢字を練習するように指示した。

b・cのような発話表現は、使役表現と異なり、必ずしも事態の発生（＝子供が漢字を勉強すること）までは含意しない点で違いもあるが、事態が発生した場合は、その相違点は曖昧になる。

使役表現に限らず、ボイスの機能として指摘される機能の一つは、複文・連文における動作主・主題の一貫性を保持するという機能である。

- 8) a 母親は子供を病院へ連れて行き、子供は診察を受けた。
b 母親は子供を病院へ連れて行き、診察を受けさせた。
- 9) a 母親は子供を病院へ連れて行った。そして、子供は診察を受け

た。

- b 母親は子供を病院へ連れて行った。そして、子供に診察を受けさせた。

a の文では、主題（母親）が、先行する節・文と後行する節・文では異なるが、b の文では一貫しており、文としての連結性が高まる。

そしてこの機能は談話・テキストという、より広い言語単位においても使役表現の使用を動機づける可能性がある。本稿ではこうした特性に注目し、単文、そしてそれを越えた複文において、使役表現がどのように使用されているかを検討していく。

3 調査概要

3.1 言語データとしてのシナリオ

今回使用した言語データは、映画『男はつらいよ』（1～8、10～20、22～27）の 25 作のシナリオと、テレビドラマ『東京ラブストーリー』のシナリオである。ここに出現した使役表現を全て抽出し、分析する。

近年、コーパスによる大量の言語データを使用した帰納的・実証的な研究が盛んになっているが、その際、考慮する必要があるのは、研究目的に合ったコーパスであるかどうか、ということであろう。日本語教育研究における同種の調査研究においては、話しことばが重視され、その結果、コーパスとしては自然談話が最も価値があるとされる傾向がある。

だが、学習者のモデルとして自然談話が最適なものであるかという点については、検討の余地があると思われる。自然談話は言語以外のさまざまな情報によって支えられたコミュニケーションであり、そのため、省略や他の参加者の発話との重なり、共話などの現象が起り、多くの点で「不完全」な発話でも許される余地がある。また、自然談話には、母語話者であっても、年齢、性別、地域などによってバリエーションがあり、さら

(4)

には同一の話者であっても、対話の相手や状況によってバリエーションがある。そのような中から一般的な学習者がモデルとすべき自然談話を選定することは非常に難しい問題である。

それに対してシナリオは、あくまでも話しことばを擬似的に創作したものであるという弱みはあるが、実際の話しことばよりもコントロールされ整えられており、種々の夾雑物が排除されている点では、むしろ学習者にとってはモデルとなる言語表現が多いのではないだろうか。

こうした観点から、本研究ではシナリオを資料として使用することとする。

3.2 使役表現の分類

使役表現の認定としては、動詞の語幹に「(s) as (er) u」接続させた形態であり、非使役形に戻せる文を使役表現と認定した。そのため、「見せる」のように「見る」から派生した形態でないものや、「問い合わせる」のように非使役形による表現(=*問い合わせ)が成立しないものは排除した。

次に、使役表現として認定・抽出された文を、その出現位置により、次の6種類に分類する。

① 単文末に現れる場合

10) 母親は息子に薬を飲ませた。

② 引用節に現れる場合

11) 母親は息子に薬を飲ませると言った。

③ 接続辞で終わる文末に現れる場合

12) 息子に薬を飲ませないと。

④ 連用的複文先行節に現れる場合(複文 I)

13) 母親は息子に薬を飲ませたので、安心した。

⑤ 連体的複文先行節(=連体修飾節)に現れる場合(複文 II)

14) 息子に薬を飲ませた母親は、安心した。

⑥ 複文後行節 (=主節) に現れる場合 (複文 III)

15) 母親は急いで家に帰り、息子に薬を飲ませた。

使役表現の出現位置については、①が単文であり、④～⑥が複文であるのに対し、②③は、単文と複文の両者の性質を持つものと言える。

また、使役表現は、授受表現と組み合わせて用いられることが多いことが、先行研究において指摘されている (高橋・白川 2007)。よって、①～⑥とともに、使役授受表現も別にカウントする。

4 使役表現が使われる文

4.1 調査結果

各シナリオに出現した使役表現の内訳は以下ようになった。() に示した数字は、そのうちの使役授受表現の数値である。

2つのシナリオは、本来の分量が大きく異なるため、総数には差があり、

表1 男はつらいよ

単文	引用節	接続辞文末	複文 I (連用)	複文 II (連体)	計
118(41)	9(1)	19(3)	35	15	196(45)

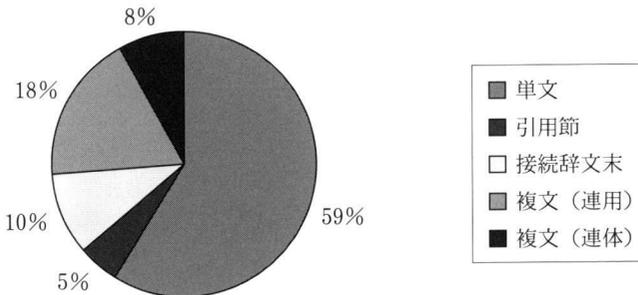


図1 男はつらいよ

(6)

表2 東京ラブストーリー

単文	引用節	接続辞文末	複文 I (連用)	複文 II (連体)	計
27(8)	3(1)	1	5	8	44(9)

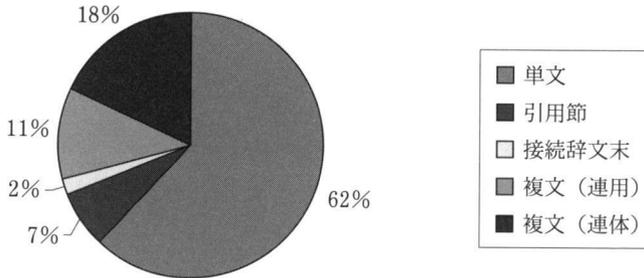


図2 東京ラブストーリー

また複文 I (連用) と複文 II (連体) の比率に違いが見られるが、単文と複文の比率は、類似したものになっている点が注目される。

4.2 単文で使用される使役表現の特徴

4.2.1 使役授受表現

単文で使用される使役表現としてまず注目されるのは、高橋・白川(2007)でも指摘されているように、授受表現と共起した使役授受表現である。ただし、単文で使用される場合の多くが使役授受表現というわけではなく、「男はつらいよ」では118例中41例(35%)、「東京ラブストーリー」では27例中8例(30%)である。ただし、逆に使役授受表現から見ると、複文ではなく単文に出現する比率は高く、「男はつらいよ」では45例中41例(91%)、「東京ラブストーリー」では9例中8例(89%)であることから、使役授受表現は単文末において出現している(複文では出現しない)と見て良いだろう。だが、単文末に出現する場合の多くが使役授受表現であるとは言えない。

使役授受表現には「てもらう系・てくれる系・てあげる系」の3系統があるが、シナリオにおいては全てが出現していた。

(1) てもらう系

- 16) 寅「では諸君、中村為吉、妻駒子両人の前途を祝して、ここでさ
さやかながら万才を三唱させていただきます」(男はつらいよ
3)
- 17) 早苗「あの、ちょっと急用が出来ましたので遅刻させていただき
ませんでしょうか」(男はつらいよ 22)
- 18) 絹子「恐れ入りますが寅様。二人きりにさせて頂けましたら」
(男はつらいよ 23)
- 19) 寅「旅の者ですが、通りすがったのも何かの縁、お焼香の1本も
あげさせていただきますか」(男はつらいよ 27)
- 20) 歌子「お待ちどうさま。早引させてもらっちゃった」(男はつら
いよ 13)

(2) てくれる系

- 21) さくら「おねがいです、もう少しいさせて下さい」(男はつらい
よ 23)
- 22) リリー「寅さんがこうやってごはん食べさせてくれたの、みんな
夢だったりして」(男はつらいよ 25)

(3) てあげる系

- 23) 雅子「退院する時、お医者様に、もう好きなようにさせてあげな
さいって、言われたの。」(男はつらいよ 18)
- 24) さくら「リリーさんに聞かせてあげたかったなあ、今の話……」
(男はつらいよ 15)
- 25) さくら「一度はお兄ちゃんと交替して、私のことを心配させてや
りたいわ。」(男はつらいよ 8)
- 26) 寅「俺のいた部屋に下宿させてやってくれよ。家賃なんか取るな

(8)

よ。」(男はつらいよ 11)

- 27) 永尾の声「普通の娘なら、行かせたりしない、ずっと傍に置いて、俺が四六時中支えてやろうって思う——けど、リカは違うんだ、自由にしてやりたかった、あいつのしたいようになって、あいつの望み通りになって、遠くからそれ応援してやればいいって思ってたんだ——だから俺、あいつを行かせてやろうと思った——けど、それが余計にあいつ、傷つけちゃった」/リカ、店員に声をかけられ、笑顔で答えてる。」(東京ラブストーリー)

4.2.2 文末の形態

シナリオにおいては、「母親が息子に薬を飲ませた。」というような単純な形態はほとんど出現していない。以下は唯一の例である。

- 28) 寅「そのことについては今晚、みんなにじっくり話を聞かせる。
ちえ、あー、とりあえず二階に行って頭をちょっと休めよう。ちえ、ね。」(男はつらいよ 22)

単純な形態は出現しないが、他の形式と複合した多様な形態が見られた。当然のことながら、普通体・丁寧体ともに出現し、平叙文だけでなく疑問文も、また肯定形だけでなく否定形(させない)も出現する。命令形(させろ)、意向形(させよう・させましょう)、依頼形(させて)、否定の依頼形(させないで・させないでくれ)、禁止形(させるな)のような活用形その他、「てほしい・てはいけない・のだ・ほうがいい・ようにする」などの文末表現とも共起している。また使役受身表現(させられる)も出現した。補助動詞と組み合わさる例は、授受動詞の他、「てくる」「てしまう」が出現している。またこれらに終助詞が付加する場合もある。

- 29) 博「ただ大切なことは、お兄さんにお母さんのことを思い出させないということです」(男はつらいよ 2)

- 30) 寅「じゃ、すぐ酒屋行って叩き起こして十本位ここへ届けさせろ」

- (男はつらいよ 22)
- 31) 男「その若い衆に取りに来させましょうか、それまであんた、どっかでお茶でも飲んでたらいいですよ」(男はつらいよ 23)
- 32) 永尾「——簡単じゃないもんな」/さとみ「うん、簡単じゃないから、宿題にさせて?」/永尾「(微笑って、頷く)」(東京ラブストーリー)
- 33) リリー「女が幸せになるには男の力を借りなきゃいけないとでも思ってんのかい。笑わせないでよ」(男はつらいよ 15)
- 34) 寅「おい……余り世話焼かせるなよ、お前、ずっとタクシーで追いかけて来たんだぞ、おい、」(男はつらいよ 5)
- 35) さくら「憶えているわよ、お兄ちゃんがさ、柿とかおいもの干したの盗んで来て食べさせてくれたわ」(男はつらいよ 25)
- 36) 博「庭のある家に引越したら買ってやるって、今迄我慢させて来たんですけど、」(男はつらいよ 19)
- 37) 竜造「いやあ、この間なんか、ずいぶん気まずい思いをさせちゃったぜ」(男はつらいよ 7)

4.3 複文で使用される使役表現の特徴

使役表現は複文の先行節(従属節)および後行節(主節)に出現することが可能であるが、今回の調査では、複文 III, すなわち後行節(主節)に出現する例は見られなかったため、本節では先行節(従属節)に現れた場合のみを分析する。

4.3.1 連用節

「男はつらいよ」において、複文連用節に使役表現が現れたのは 35 例であり、そこで使用された接続辞(いわゆる接続助詞類)は、次のようになった。圧倒的に「て形」節が多いことがわかる。

表3 「男はつらいよ」接続辞

て	から	ば	が	たら	と	けど	には	ながら	ので	ように	計
19	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1	35

- 38) 田所「つらい思いをさせて, すまなかったな。」(男はつらいよ 16)
- 39) 藤村「そうだ, あの場合, 仕方がなかった, ああでもしなきゃ君は注射をうたせなかったからね, 悪かったとは思ってる」(男はつらいよ 2)
- 40) 博「そうなんだよ, 二人の言い分聞いて見たんだけどね, 社長に言わせりゃ, 人が金の事で走り廻っている時に色恋沙汰にうつつをぬかしやがってということになるし,」(男はつらいよ 14)
- 41) 日奏「つまり冬子の婿にな…………あれにもいろいろ苦労させたがいい相手が見つかってよかった…………まだ人には言うなよ」(男はつらいよ 1)
- 42) 寅「安心しろ? よくそういう事がぬけぬけと言えるなオイ。俺に安心させたかったら何故早く電話しねえんだよ!」(男はつらいよ 12)

「東京ラブストーリー」では, 連用節はわずか5例であったので, その使用に一定の傾向を読み取ることはできないが, ただ, 「男はつらいよ」は異なり, 「たり(する)」を使用した例が3例見られた。

- 43) 時子「さとみ, どうして永尾くん, 行かせたりしたの?」(東京ラブストーリー)

表4 「東京ラブストーリー」接続辞

たり	ては	と	計
3	1	1	5

この「たり(する)」は、形態的には複文接続辞を用いているものの、機能的には単文末と見てよい表現である。

4.3.2 連体節

連体節(連体修飾節・名詞修飾節)末に出現する使役表現については、その被修飾名詞の実質性を見たところ、表5のようになった。半数が形式的な名詞「の」「こと」そして「くらい」(1例)に付く例であり、さらに実質的な名詞であっても、その半数は形式的な使用と判断できるものである。すなわち、全体では4分の3が形式的な名詞に付いていると言える。

表5 被修飾名詞

	の・こと・くらい	その他の名詞
男はつらいよ	8	7
東京ラブストーリー	4	4

- 44) 夏子「そしてね、とってもびっくりするような、お父さんにどうしても聞かせたいことに出会ったのよ……寅ちゃんがいたの」
(男はつらいよ 2)
- 45) さくら「どうしてかって言うとおね、あの女の人、ちょうどあの子位の子供死なせたことがあるんですって。」(男はつらいよ 14)
- 46) 三上「おい、聞いてんのか?」/永尾「うるせえなー、おまえの話なんか聞けるか」/三上「判ってる——けどな、彼女の気持ちも考えてやれ」/永尾「——?」/三上「彼女がおまえをさとみの所に行かせたのは、おまえが好きだからなんだ」(東京ラブストーリー)
- 47) リカ「んぐ(と、飲みこんで)さとみちゃんって、真面目過ぎるよ」/さとみ「——」/リカ「たまにはハメ外して、三上くんにはヤキモチ妬かせるぐらいしなきゃ?」/さとみ「うん——」(東京ラ

(12)

ブストーリー)

実質的な名詞に付く 11 例のうち、次の 5 例は、一般的な名詞修飾節である。

- 48) 散歩「お前は実に、馬鹿だなァ、お前を退学させた校長のタヌキも馬鹿だが、そのタヌキをブン殴ったお前のもっともっと馬鹿だぞ」(男はつらいよ 2)
- 49) 竜造「俺んところはな、手前みてえな極道に飲ませるビールはねえんだ」(男はつらいよ 9)
- 50) 寅「何だ、お前、誰か、俺に会わせたい人でもいるのかい」(男はつらいよ 9)
- 51) 永尾「またおまえのせいで友達失くしたよ」/三上「ハハ、そういえば高校ん時からそうだったよな」/永尾「おまえが泣かせた女の子、一人一人慰めて回ったこともあった」
- 52) リカ「(バトンを突きつけ) 永尾さん永尾さん、関口さとみさんを泣かせたって噂は本当なんですか?」

だが、残りの例文(6例)は、名詞は実質的であっても、形式的に使用されている。

- 53) 寅「梅の花が咲いております。どこからともなく聞えてくる谷川のせせらぎの音も、何か、春近きを思わせる今日此頃でございます」(男はつらいよ 4)
- 54) 寅「俺が夕べ帰ってきたときお前達、俺のことを病院に行かせない算段したろう。」(男はつらいよ 14)
- 55) 寅「ったく、やる方もやる方だしやらせる方もやらせる方だよな」(男はつらいよ)
- 56) 三上「この間リカに逢った」/永尾「——」/三上「このまま行かせる気か」/永尾「——俺に引き止める権利はない」(東京ラブストーリー)

- 57) リカ「やってらんないなんて思ったりする時もある、どんなに元気な歌を聞いてもバラードに聞こえる夜ってある」／永尾「リカ——」／リカ「——」／永尾「俺、君みたいに人を元気にさせる方法知らない」(東京ラブストーリー)

このことは、使役に限ったことであるのか、それとも、日本語の連体修飾表現においては、被修飾名詞が実質的な場合よりも形式的な場合が多いということであるのか、改めて調査を行う必要があるだろう。

5 日本語教材との比較と日本語教育への応用

5.1 日本語教材に見られる使役表現の特徴

4節で見たようなシナリオに見られる使役表現の特徴は、現代日本語の実態の一面の特徴を示しているが、では、日本語教育に用いられる教材においても、その特徴は一致するのであろうか。代表的な初級日本語教科書『みんなの日本語』、および指導参考書『教師と学習者のための日本語文型辞典』に現れた例文について、同様の調査を行った。

5.1.1 『みんなの日本語』

『みんなの日本語』では第48課において使役を扱っている。そこで取り上げられた例文(練習問題では解答文の数も含む)は以下の通りである。

圧倒的に単文が多いのは、教育的配慮として理解できるものの、それが不自然な使役表現を産出させる原因となる可能性があることには注意しなければならない。また使役授受表現「～させていただく」が導入されているが、丁寧な依頼表現としての扱いであるため、「いただく」以外の授受表現については言及はない。

形態については、単純な言い切り「～させます。」が多い中で「～させている」という継続相を取り上げている例文が、練習Bに3例、練習C

表6 『みんなの日本語』

	単文	引用節	接続辞 文 末	複文 I (連用)	複文 II (連体)	複文 III (主節)	計
例文	2						2
文型	3(1)			2		1	6(1)
会話	2(2)		1(1)				3(3)
練習 A	11(3)						11(3)
練習 B	20(5)					11	31(5)
練習 C	6(3)					3	9(3)
計	44(14)	0	1(1)	2	0	15	62(15)

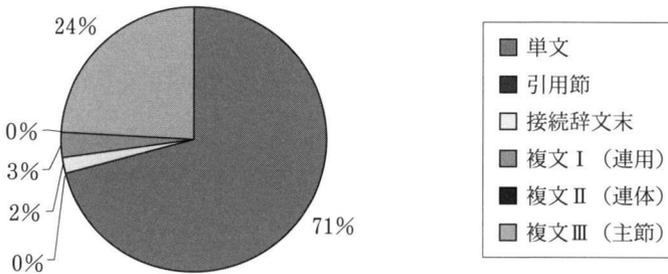


図3 『みんなの日本語』

に3例あることは注目される。

58) 練習 B 3 例 1 体にいいです・毎朝子供は牛乳を飲んでます。

→ 体にいいので、毎朝子供に牛乳を飲ませています。

59) 練習 C 1 1) 食事のあとでお皿を洗います

→ 食事のあとでお皿を洗わせています。

さらには、シナリオには出現しなかった複文主節に使役表現が出てくる例(複文 III)を多く取り上げているのは、特筆すべきであろう。58)に挙げた練習 B の3の例もそうであり、また次もそうである。

60) 練習 C 3 1) 国から姉が来ます。午後から休みを取ります。

→ 国から姉が来るので、午後から休みを取らせていただけませんか。

これはおそらく、使役表現が自然に使われる状況を説明するために、従属節を付け加えているものと思われる。すなわち、単文末に使役表現が出現する例文を作ろうとしても、それだけでは自然な文とならないため、従属節が必要となったのではないか。それだけ使役表現が、単文だけで示してもわかりにくい、ということの現れであろう。

また、先行節（従属節）に使役表現が出現した2例は、次の通り、「から」節を用いたもので、しかもいずれも倒置された例文であって、バリエーションに乏しい。

61) 「駅に着いたらお電話をください。係のものを迎えに行かれますから。」

「わかりました。」

62) 「ワット先生の授業はどうですか。」

「厳しいですよ。学生に絶対に日本語を使わせませんから。でも、言いたいことは自由に言わせます。」

接続辞が文末に現れる1例を取り入れているのは評価できる。

63) それでちょっと国へ帰らせていただきたいんですが……。

使役を学ぶ段階では、「から」「が」以外にも、4節の調査に出てきた複文先行節（て形、ば、たら、たり、と、等）はほとんど全てが既習になっているにもかかわらず、そうした表現を組み合わせた例文がないのは残念である。

5.1.2 『教師と学習者のための文型辞典』

『教師と学習者のための文型辞典』では、見出し語「させる」の下に、その用法を次の6つに大別し、それぞれに例文を提示している。

64) 1 V-させる

(16)

- 2 V-させてあげる〈許可〉
- 3 V-させておく〈放任〉
- 4 V-させてください〈許可求め〉
- 5 V-させて もらう／くれる〈恩恵〉
- 6 V-させられる〈使役受身〉

それぞれの用法も興味深く、授受の補助動詞以外にも「ておく」が取り上げられていることや、授受表現も3系統全てが取り上げられている点が注目されるが、ここではその詳細には立ち入らず、シナリオと同様の調査結果を次表に示す。

注目されるのは、『みんなの日本語』同様、複文 III（主節）の出現の多さである。またそれを含めて全体の半数以上が複文となっている。これらの点からも、使役表現に関しては、単文では自然な例文、わかりやすい例文が提示できないことがわかり、使役表現は複文あるいは連文のレベルで

表7 『教師と学習者のための日本語文型辞典』

単文	引用節	接続辞 文末	複文 I (連用)	複文 II (連体)	複文 III (主節)	計
20(4)	1	0	9(2)	4	14(7)	48(13)

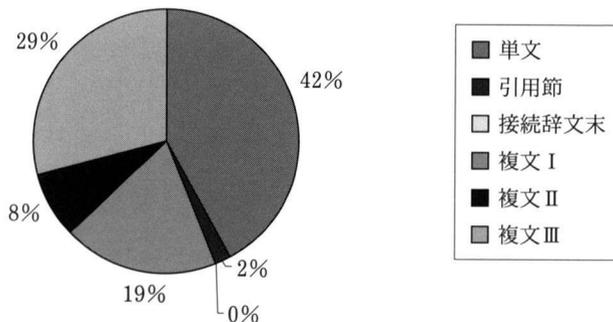


図4 『教師と学習者のための日本語文型辞典』

使用される文法項目であることが改めて示されていると言えるだろう。

- 65) 彼は、いつも冗談を言ってみんなを笑わせる。
- 66) 疲れているようだったので、そのまま眠らせておいた。〈放任〉
- 67) そんなにこの仕事がやりたいのなら、やらせてあげましょう。
〈許可〉
- 68) いつもごちそうになってばかりですので、ここは、私に払わせて
ください。〈許可求め〉
- 69) 両親が早く亡くなったので、姉が働いて私を大学に行かせてくれ
た。〈恩恵〉

また、複文Ⅰ（連用）9例のうち、6例が「て形」によるものであり（他は「てから」「ては」「と」各1例）、その点はシナリオ調査の結果に類似していたが、複文Ⅱ（連体）では、形式名詞「の」が用いられている例が1例のみであった点は異なっている。また、肯定形のみが出現し、否定形が出現しなかったことや、活用形にもバリエーションが少ない点なども相違点として指摘できるだろう。

5.2 「拡大文型」に向けて

初級日本語の教材は文型シラバスに基づいて作成されたものが多いが、新たな文法項目（文法）を導入する際は、できるだけその項目のみを使用した文、いわば「単純な文」「純粋な文」を例文として提示する。それは、参考書などでも同様であるが、当該項目の基本構造（基本文型）を理解・産出させることを目指すには適切でもあり、必要でもあろう。

だが、4節でも見たように、現実の文や発話では、そのような「単純な文」「純粋な文」はあまり使用されていない可能性が高い。よって、指導においても「単純な文」「純粋な文」を越えて、「複雑な文」「雑多な文」を作り出せるようにしていくが必要になる。

市川保子（2007）は、「文型指向型」の機械的な練習の段階から、「内容

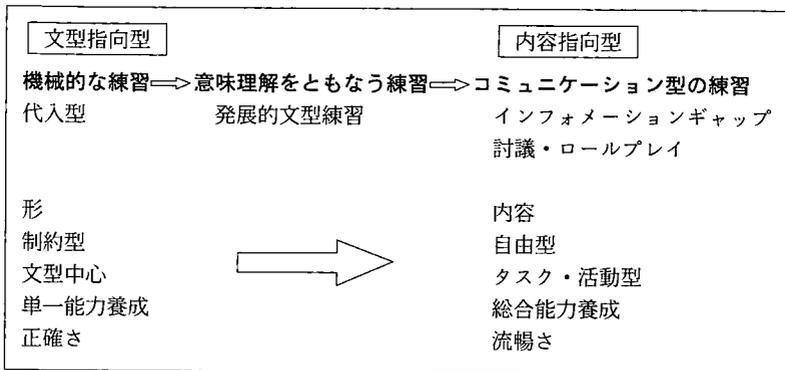


図5 練習の種類 (市川 2007 : 173 より)

指向型」のコミュニケーション重視の練習に至る途中に、「意味理解を伴う練習」「発展的文型練習」の必要があることを指摘している。

基本的ではあるが単純な文から、既習の文法項目を組み合わせた複雑な文を作り出ししていく練習をすることで、より実態に合った、そしてコミュニケーション上も有効な言語表現を産出していくことができるようになるであろう。

そのような「発展的文型」を「拡大文型」と呼ぶとすると、単純な文型をどのように「拡大」させていくことができるだろうか。今回取り上げた使役表現については、次のような点が指摘できる。

第一は、平叙文以外の形態変化(活用)をもっと取り入れるということである。『みんなの日本語』では使役表現の「ている形」および「て形」は見られたが、否定形や、意向形・否定の依頼形などの形態が見られない。また第二は、既習の他の文法項目と組み合わせることである。使役表現は初級の後半(『みんなの日本語』では最後の方)に扱われることが多い。そこまでに学んだ様々な形態・形式・表現と組み合わせる使う指導をすることは、簡単ではないだろうが、既習表現の復習としても意味がある。それが初級の段階では困難であるとしたら、中上級において再度、確認すべ

き事項と見てもよいし、そもそも、活用などが十分にできない段階では、使役表現を教えても自然な使用に結びつかないと判断することもできるだろう。

使役表現に関しては特に、授受表現との組み合わせが重要で、両者の組み合わせが多く見られることは既に指摘されているが、どちらのシナリオにおいても、単文末の使役表現の31%が使役授受表現であった。両者の組み合わせは学習者には負担が大きいものであるが、使役表現を教える際に授受表現との組み合わせを導入するのは、単文レベルの自然な使役表現の使用につながるものであると言える。逆に言えば、授受表現が十分に使用できる段階でないと、使役表現の自然な使用には到達できないということもできるだろう。

『みんなの日本語』で導入されている使役授受表現は「させていただく」であり、しかも「いただく」の可能形と組み合わせた非常に丁寧な依頼表現「させていただきませんか」を扱っていた。非敬語形の「させてくれる」「させてもらう」は入っておらず、また授受表現の中で最も早く導入される「ください」を用いた「させてください」も見られない。授受表現の中で何を使役受動態として導入すべきかに関しては、再考の必要がある。

第三は、複文先行節（従属節）での使用である。先行節には、連用節・連体節があるが、連用節においては、中でも「て形」での使用を促すことは、効果的であると考えられる。

連体節の場合は、「の」「こと」など形式的な名詞を用いた様々な文型との組み合わせを促すことが考えられる。こうした練習は中上級レベルでも十分に意味ある基本練習となるであろう。

6 おわりに

使役表現は、形態的・統語的・意味的・機能的にも困難な文法項目であ

り、そのような使役表現をどのように教えるかということは初級・中級文法教育の課題の一つである。それを探るためには、まず現代日本語において、使役表現がどのように使用されているか、ということをも明らかにする必要がある。そうした観点から、本研究はシナリオをデータに、使役表現の調査を行い、主に単文・複文という観点から分類した。

その結果、使役表現は三分の二が単文で用いられ、単文の三分の一が授受表現との組み合わせ、すなわち使役授受表現であることが明らかになった。また、複文においては、主節になる例はなく、全てが従属節であった。従属節のうち、連用節においては、「て形」節が最も多く、また、連体節においては形式的な名詞を修飾する場合が多いことも明らかになった。

その結果を、既存の日本語教科書および指導参考書に見られる例文と比較した。両者には当然ながら相違点があり、またこれも当然ながら、シナリオに出現した文型は、教科書の文型よりも形態的にも表現形式の上でもバリエーションがあった。だが、その多様性は、日本語教科書から見ると、すでに既習の文法項目であることがほとんどである。そうした既習の文型・文法項目を組み合わせる「拡大文型」練習を取り入れることで、より自然な使役表現を理解・産出できることが期待される。

今後は他の文法項目においても、どのような「拡大文型」が用いられているかということ調査・分析していくことが広く必要である。

参考文献

- 市川保子 (2007) 「第9章 SFJ 再考—文法練習を中心に—」『シリーズ言語学と言語教育 第10巻 大学における日本語教育の構築と展開 大坪一夫教授古希記念論文集』ひつじ書房
- 王婉瑩 (1998) 「「せる・させる」「～てもらう」「～ように言う」の日中語対照研究—中国人学習者の習得面から」『日本語教育』99号

- 金熹成 (2003) 「使役を表す「ようにする」「ようにさせる」」『日本語と日本文学』36
- グループ・ジャマシイ (編著) (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 柴田和枝 (1993) 「日本語初級段階における受け身・使役・被役 (使役受身) 表現の指導—2—」『九州国際大学論集教養研究』4
- 高橋恵理子・白川博之 (2006) 「初級レベルにおける使役構文の扱いについて」『広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座』16号
- 田口香奈恵 (2001) 「ブラジル人児童の受身・使役表現の習得に関する事例研究—日本人児童・幼児との比較を通して—」『第二言語としての日本語の習得研究』4号
- 田中真理 (2005) 「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田 (編) (2005) 所収
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のため誤用分析—中国語母語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 中川良雄 (1995) 「日本語使役文の表現意図—日本語教科書における使役文の取り扱い—」『日本語・日本文化研究』3
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版
- 野田尚史 (編) (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田 (編) (2005) 所収
- 早津恵美子 (1992) 「使役表現と受身表現の接近に関するおぼえがき」『言語学研究』11
- 早津恵美子 (2004) 「使役表現」『朝倉日本語講座6 文法II』朝倉書店
- 楊凱榮 (1985) 「「使役表現」について—中国語との対照を通じて—」『日本語学』Vol. 4 No. 33
- 米澤みどり (1992) 「日本語母語話者による使役文の使われ方について」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』3

用例出典

- 柴門ふみ・坂元裕二 (1991) 『東京ラブストーリー—TV版シナリオ集』小学館
- 山田洋次 (1976) 『男はつらいよ <1>』『男はつらいよ <2>』『男はつらいよ

(22)

- 〈3〉』、立風寅さん文庫
— (1977)『男はつらいよ 〈4〉』『男はつらいよ 〈5〉』『男はつらいよ 〈6〉』、
立風寅さん文庫
— (1979)『男はつらいよ 〈7〉』、立風寅さん文庫
— (1981)『男はつらいよ 〈8〉』『男はつらいよ 〈9〉』立風寅さん文庫

日本語教科書

『みんなの日本語—初級 II 本冊』スリーエーネットワーク, 1998

Causative Expressions in Japanese

MAEDA Naoko

Key words: Causative (使役), Simple Sentence (単文), Complex Sentence (複文), Clause (節), Expanded Sentence Pattern (拡大文型)

The causative expression is thought to be one of the most difficult grammatical items for elementary and intermediate learners. The aim of this paper is to research on the causative expressions in scripts for films in terms of whether they appear in simple sentences or complex sentences and to compare those in a Japanese language textbook and a reference book. About 60% of the causative expressions in scripts are used in simple sentences, and one third of them are in the combination of causative and giving-receiving expressions (e. g. *-sasetemorau*). The causative expressions in complex sentences most appear in *te*-form clauses, and more appear in relative clauses which modify the formal nouns than in those which modify the general nouns. These results indicate that to practice causative expressions in complex sentences and with the combination of various kinds of other grammatical items can help the appropriate understanding and natural production of the causative expressions.